



南洲神社
南洲神社

飯倉山
南洲公園

asahi

飯森山
南洲公園



南洲神社



南洲神社





徳の交わり

西郷隆盛(南洲)と菅実秀(臥牛)が対話しているこの坐像は、鹿児島西郷屋敷において両翁が親睦を深め「徳の交わり」を誓いあったことを記念して製作したものである。

庄内藩は戊辰戦争で官軍に激しく抵抗したため厳しい処分を覚悟していたが、南洲翁の公明正大な極めて寛大な処分となった。

この南洲翁の大徳に感じ臥牛翁は明治八年自ら庄内藩士と共に訪鹿して南洲翁の教えを受け後にその教えを受けた人達の手記を基に「南洲翁遺訓」を纂刊した。旧藩主酒井忠篤公は数名の人を各地に行脚させ全国に頒布した。

南洲翁の偉大さに傾倒し生涯のすべてを尽くされた庄内南洲会の創始者である長谷川信次先生の遺志を継ぎ庄内の一隅に両翁の徳徳を偲び不易の教訓である「敬天愛人」の精神を永く後世に伝えるため、有志相諮り浄財を募り対話の坐像を建立した。

平成十三年九月吉日
財団法人 庄内南洲会

徳の交わり

西郷隆盛(南洲)と菅実秀(臥牛)が対話しているこの坐像は、鹿児島西郷屋敷において両翁が親睦を深め「徳の交わり」を誓いあったことを記念して製作したものである。

庄内藩は戊辰戦争で官軍に激しく抵抗したため厳しい処分を覚悟していたが、南洲翁の公明正大な極めて寛大な処分となった。

この南洲翁の大徳に感じ臥牛翁は明治八年自ら旧庄内藩士と共に訪鹿して南洲翁の教えを受け後にその教えを受けた人達の手記を集め「南洲翁遺訓」を発刊した。旧藩主酒井忠篤公は数名の人を各地に行脚させ全国に頒布した。

南洲翁の偉大さに傾倒し生涯のすべてを尽くされた庄内南洲会の創始者である長谷川信夫先生の遺志を継ぎ今庄内の一角に両翁の遺徳を偲び不易の教訓である「敬天愛人」の精神を永く後世に伝えるため有志相諮り浄財を募り対話の坐像を建立した。

平成十三年九月吉日

財団法人 庄内南洲会





西南戦争で西郷先生に殉じた荘内の二青年

明治十年二月、西南の役前、荘内の二青年伴兼之と榊原政治は、当時私学校にて学問に訓練に精励しておつた。

西南の役がはじまり、決死の覚悟で従軍を願ひ許された二人は、西郷先生と共に二月十七日鹿児島を出発した。伴榊原の兩名の属した隊は、最初熊本城攻撃に参加した。その後、田原坂、植木の戦いに於ける戦い振りは見事であつたと伝えられておる。

三月二十日の植木での熾烈な激斗の中で、伴兼之は政府軍の銃弾を受けて即死する。此の時榊原政治は敢然として敵陣の真只中に突進し遂に政府軍を退却させることが出来伴兼之の屍を引き取ることが出来た。

榊原青年は、其の後、人吉に赴き、連戦活躍したが、御船の戦で、敵弾を胸部に受け重傷となり、延岡の薩軍病院で手厚い看護を受けたのであつたが、五月十日遂に戦死となる。郷里荘内の人々は、この二人の死を伝え聞いて、若年乍らよくぞ荘内人の真面目を發揮して西郷先生に殉じて呉れたと、齊しく心から感謝したのであつた。

鹿児島島の南洲墓地の中に、しかも西郷先生のお墓のすぐ前に、我が荘内出身の二青年の墓がある。御両人の行動を後々までも語り伝えるとともに、心より御冥福をお祈り申し上げます。

行 101 好 子

100 好 101 好 子

好 101 好 子

好 101 好 子

好 101 好 子

好 101 好 子

好 101 好 子

好 101 好 子

好 101 好 子



木孝思道夕整統

人世浮沈似腦的

醒來回光養向日

美生可平遠道探休

海内方已皆存冠

市味博日振衣生

知中於下附之

影之白意鬼使筆城

木



山一峰美连
晴之野色空
松石出
翠色
深
溪
石
水
流
石
出
时
时
时



程心好子心子好子心子
好一若真理定一極樂子
好一若真理定一極樂子
好一若真理定一極樂子
好一若真理定一極樂子
好一若真理定一極樂子

多謝

